〈研究ノート〉

柔道の国際化を考える
フランス、ドイツ、ブータン及びカンボジアを事例に

マーヤ ソリドーワル（Sori Doval Maja）

はじめに

2018 年現在、国際柔道連盟には 204 ヶ国や地域が加盟している[1]。1882 年に「日本伝講道館柔道」として誕生した柔道は約 130 年間を渡って世界の「JUDO」へと展開し、オリンピックの競技種目として世界中に広く知られるようになってきた。海外普及と伴って日本本来の柔道は各国の文化の影響を受けながら変容してきたが、その結果として国によって異なっている指導法や技術を示す各国独自の柔道が展開してきた。例えば、技術の面から見ると、モンゴル相撲、ロシアのサンボ、欧米のレスリング等の格闘技は競技柔道に影響を及ぼしたことによって、日本とは大きく異なる柔道スタイルを形成してきたことがわかる。

本稿において歴史と現状を見ながら柔道の国際化の現状とその意義を考察してみたい。そのため、国際柔道連盟の加盟国であるフランス、ドイツ、ブータン及びカンボジアの四ヶ国を事例にしながら各国の柔道の歴史と現状を考察し、国際化の意義を考えることにしたい。

柔道の歴史が長く、柔道が社会に定着してきた柔道強国のフランスやドイツとは異なってブータンやカンボジアは柔道が発達中の国である。日本の柔道人口の約 3 倍があるフランスは指導者養成のシステムが優れており、競技柔道においても世界の柔道の強国の一つである。同時に、フランス独自の指導者養成システム及び指導法はヨーロッパ諸国の柔道に影響を及ぼし、近年日本にも注目されてきた。もう一つの事例として取り挙げるドイツもヨーロッパの柔道強国の一つであり、生涯スポーツとしての柔道の普及が成功した事例である。それに対して柔道の歴史は 10 年も経っていないブータン及び内戦の影響を受けたカンボジアの柔道が発達中で、日本本来の柔道の姿を示す。ブータンとカンボジアを事例として選んだ主な理由は、2017 年 8 月にブータン、2018 年 1 月にはカンボジアにおいて現場視察を行ったからである。

本稿においてまず、1.（として）柔道の海外普及と柔道の国際化の歴史的な背景を述べることにする。続いて、2.（として）フランス、ドイツ、ブータン、カンボジアそれぞれの柔道の主な展開を述べてから、その現状と特性を把握してみたい。以上の 4 ヵ国の柔道の現状の考察に基づいて、結論として柔道の国際化の意義を教育の観点から考えてみたい。

1．柔道の国際化の歴史的な背景

柔道を創始したのは、嘉納治五郎（1860 ～ 1938 年）である。日本古来の流派柔術を学んだ嘉納は、当て身技や固め技を中心とした天神真揚流と投げ技が優れた起倒流という二流派の技法を基にして「日本伝講道館柔道」を開始した。嘉納は流派柔術の技を合理的に体系化し、各技に技名称も新たに付けることにした。例えば、腰を使って投げる技を「腰技」に分析し、相手を腰に乗せて投げる技に「大腰」という技名称を付けた。

また、修行者の到達レベルを色の帯で示す段級制度を導入し、安全に勝負できる競技ルールも考案した。さらに、嘉納は柔道の教育的な価値を強調し、1889 年「柔道並二其ノ教育上ノ価値」についての講演を行い、身体鍛錬と健康増進を目標とする「体育法」、技術の習得を中心とする「勝負法」、道徳を養うための「修心法」からなる三育教育としての柔道を述べた[2]。また、柔道の理念を身心の力を最も有効的に使用することを意味している「精力善用」と、自らの力を世のために尽くすという意味である「自他共栄」という柔道原理としてまとめるこ

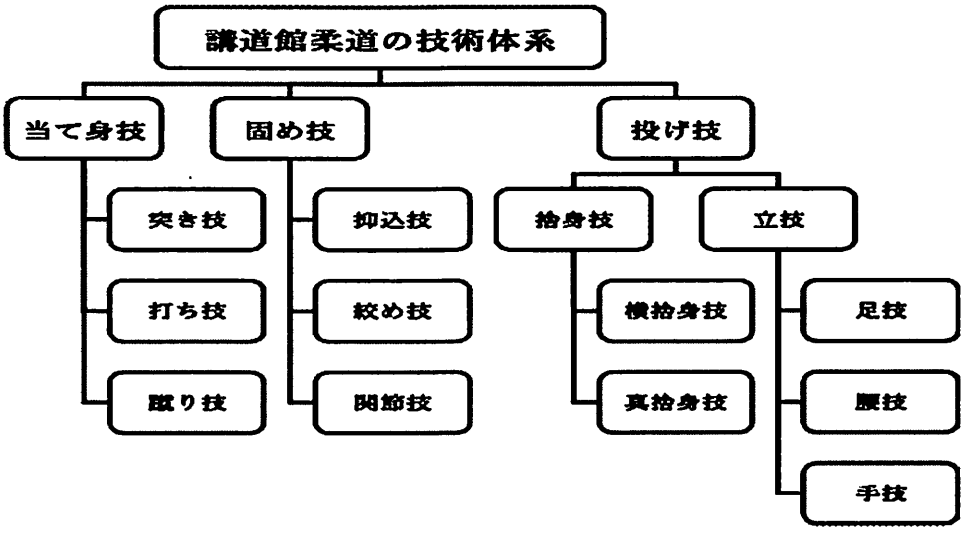

図 1　講道館柔道の技術体系

とにした [3]。さらに、極めて早い段階から柔道の海外普及を図ることにした。

1889 年、嘉納はヨーロッパの教育事情の視察を行った際に初めて海外において柔道の紹介を行う。後に何回も海外に渡る機会があり、嘉納自身はあわせて 12 回海外で柔道の紹介を行った。[4]

日露戦争（1904 ～1905 年）後、欧米において日本文化への関心が高まり、その中で柔術と柔道が日本の運動文化として注目を集めた。谷幸雄、大野秋太郎、東勝熊等の日本人柔術家はサーカス等で柔術の演武を行い、レスリングやボクシングの選手と対戦した格闘異種試合において柔術の強さを示したのである。結果として柔術の実用性が認められ、警察や軍隊の訓練に採用されるようになる。戦前のヨーロッパにおいて柔術と柔道の区別がほとんどなく、嘉納治五郎の柔道は一つの柔術の流派として捉えられた。1920 年代後半に入ると、柔術は護身術であることに対して柔道はスポーツであるという解釈が現れてくるようになる。

柔術の海外普及が始まったほぼ同じ時期に講道館からの指導者の正式派遣も始まる。1903 年、婦人とアメリカに渡った山下義韶（1865 －1935 年）は最初となる。山下はハーバード大学、アナポリス海軍兵学校等において柔道の指導を行い、アメリカの大統領のセオドア・ルーズヴェルトにも柔道を教えることになる。翌 1904 年、富田常次郎、佐竹信四朗と前田光世は山下に続いて講道館から派遣されて渡米する。後にブラジリアン柔術の父として知られるようになったエリオ・グレーシー（Helio Gracie、1913 －2009 年）が前田に柔道を習ったことは有名である。1906 年、佐々木吉三郎はハンガリーに派遣され、翌 1907 年、ハンガリー語の柔道教本を著すことにもなる。

その他に移民、留学生等をも含む柔道の海外普及に大きく貢献した日本人指導者がいた。その中に、イギリスにおいて柔術と柔道の普及に重要な役割を果たした柔術家の谷幸雄と小泉軍治がいる。1918 年、小泉は剣術と柔術の指導を中心とするロンドン武道会を開設する。このロンドン武道会はヨーロッパの最も歴史が長い柔道クラブとして今日まで続く。1920 年、小泉と谷は講道館の会員となり、以前、柔術を指導したロンドン武道会は講道館柔道を教えることになる。1926－1927 年頃にロンドン武道会は日本の段級制度を改良し、6 段階に分けた色帯（級外・白、5 級・黄、4 級・オレンジ、3 級・緑、2 級・青、1 級・茶）の制度を導入した。

以上のように、柔道の海外普及は戦前から始まり、柔道は徐々に各国の文化に定着することになる。

戦後になると、柔道の競技スポーツへの展開

が始まる。1948年のロンドンオリンピックの際に、オランダ、イギリス、オーストリア及びイタリアは欧州柔道連合を結成したが、1951年にアルゼンチンが加盟すると同時に、国際柔道連盟となった。日本が加盟したのは、翌1952年のことになる。

1956年、第一回世界柔道選手権大会が東京で開かれる。1964年の東京オリンピックにおいて柔道は初めて競技種目として行われるが、当時の柔道競技は軽量級・中量級・重量級・無差別級の4階級に分けて行われた。日本人の選手はこの4階級の内、3階級で優勝したが、無差別級においてオランダのヘーシンクは日本の神永昭夫（1936～1995年）を破って優勝を果たした。

東京オリンピック以降、ヨーロッパにおいて柔道の人気が高まり、徐々に子供のスポーツへと展開してくる。同時に、日本とは異なった指導法が展開してくる。

2．フランスにおける柔道の歴史、現状と特性

（1）フランス柔道の略史

フランスにおいて特にモシェ・フェルデンクライス（Moshe Pinchas Feldenkrais, 1904－1984年）及び河石酒造之助（1899－1969年）は柔道の普及に大きく貢献した。1930年から1940年にかけてパリに滞在したウクライナ出身のユダヤ人フェルデンクライスは後にフェルデンクライス・メソッドの開発者として広く知られるようになる。フェルデンクライスはパリ立公共業事業学校に在学し、後に放射線科学の先駆者となったジャン・フレデリック・ジョリオ・キュリー（Jean Frederic Joliot Curie, 1900-1958年）の助手として勤めることになる。1933年から校内の施設を使用して柔術の指導を始める。フェルデンクライスは科学的なアプローチを捉えながら護身術を中心とした柔術を指導した。同1933年の9月、フェルデンクライスは嘉納治五郎と出会い、嘉納の助力を得られることになった。1936年にフランス柔術クラブを開設した際に嘉納も来賓客として出席した。フェルデンクライスは河石酒造之助を指導者として招くことにした。

1940年、スポーツは国家の支配下に置かれ、1942年に柔術と柔道の専門部局が創られたが、この専門部局は1946年にフランス柔道柔術連盟として独立することになる。また、1950年代に入ると、道上伯（1912－2002年）、粟津正蔵（1923－2016年）等の指導者の影響でフランス柔道の技術レベルが向上することになる。

1955年、「柔道及び柔術の教授の職業並びに当該格闘スポーツの教育にあてられる道場の開設を規制することに関する法律」が可決されると同時に、柔道指導者の国家資格が導入されるようになる。1974年、柔道を含む競技スポーツ46種目の国家資格と試験制度が統一化されると共に三段階の資格制度が導入されることになる（濱田　2015：90）。

1975年、ジャン・リュック・ルージェ（Jean Luc　Rouge）はフランス初の柔道の世界チャンピオンとなる。それ以降、フランスは競技柔道の強国へと展開し、ドゥイエ（David Douillet）やリネール（Teddy Riner）等の数多くのフランス人選手は世界レベルで成績を残している。

（2）フランス柔道の特性

フランス柔道の特性として中央集権化体制の政策に従った独自の指導者養成システム、教育と競技スポーツとしての柔道の両面を普及させる制度が挙げられる。

先述したように、フランスにおいて1955年の「柔道及び柔術の教授の職業並びに当該格闘スポーツの教育にあてられる道場の開設を規制することに関する法律」が可決され、柔道指導者の国家資格が義務化されることになる。したがって、この法律はフランス独自の指導者養成システムの出発点になったといえる。1974年、この制度が他の競技スポーツと統一した三段階からなるスポーツ指導者の国家資格認定（Brevet d' Etat d' Educateur Sportiv, BEES）の制度に整備される。

フランス柔道連盟は教育としての柔道と競技スポーツの柔道の普及に尽くしている。フランスにおいて地域の柔道クラブに加盟している柔道家全員は年齢やレベルに関係なくフランス柔

道連盟に登録される。また、昇級昇段審査もフランス柔道連盟の管理下に置かれ、フランス柔道連盟のガイドラインに従って行われる。昇級は初心者から 1 級の上級者へと至る 8 段階からなる。フランス柔道連盟は子供の発達発育段階を意識した指導法を強調し、年齢別、対象別の指導マニュアルを含む教材を作成している。また、柔道の文化性や教育性も強調されている。例えば、新渡戸稲造の武士道を参考にして創られたフランス柔道のモラルコードは「礼儀」、「謙虚」、「尊敬」、「誠実」、「勇気」、「自制」、「友情」、「名誉」という柔道の価値観を示す。この柔道モラルコードを示すポスターはフランス各地の柔道場に貼ってある。[5]

柔道の教育性が強調されている結果として、柔道は子供を中心とするスポーツとして高く評価されている。

フランス柔道の強さのもう一つの柱は選手発掘や育成の制度にある。地域の柔道クラブをベースにする選手を発掘し育成する独自の制度が存在しているのである。各地域の柔道クラブに発掘された選手は地方強化拠点に選抜されることになる。その強化拠点の制度の第一段階は 11 ～ 13 才の選手を対象に 40 ヵ所あるクラース・デパルトゥマンタルである。その次の段階に 13 ～ 16 才の選手を対象にする「ポール・エスポワール」の 26 ヵ所がある。続いて、17 才以上の選手が選抜される 4 ヵ所のポール・フランスがある。2006 年、フランス柔道連盟のフランス柔道研究所が開設される。この施設の中に最も実力がある 18 ～ 23 才のジュニア強化選手約 50 名を育てられる国立トレーニングセンター（INEF, Institute National d'Entraînement et des Formation）が設立された。

頂点にはオリンピック種目のナショナルチームの強化選手を対象にする施設である国立スポーツ体育研究所（INSEP, Institute National du Sport et des Éducation Physique）がある。

3．ドイツにおける柔道の歴史、現状と特性

（1）ドイツ柔道の略史

ドイツにおいて柔道の歴史は柔術の紹介と普及に始まる。1906 年、エリッヒ・ラーン（Erich Rahn、1885 ～ 1973 年）はベルリンにおいてドイツ初の柔術クラブを開く。ラーンは警察や軍隊を中心に護身術へと単純化した柔術を指導した。1920 年代になると、講道館柔道の本格的な普及も始まる。会田彦一、工藤一三等はドイツで指導を行い、嘉納治五郎自身は、1928年に柔道の紹介を行い、1933 年に講習会も行った。

しかし、戦前のドイツでの柔道の普及の基盤を作ったのは、ラーンに柔術を習ったアルフレード・ローデ（Alfred Rhode, 1896 － 1978 年）である。ローデは柔術の危険な技を排除し、柔術のスポーツ化を図った。1929 年、ドイツ初の柔道試合となったドイツの柔術家とロンドン武道会の柔道チームが対戦した交流試合を開催した。

さらに、ローデは 1932 年にフランクフルトにおいて第一回国際柔道夏期講習会を開く。ドイツ以外にハンガリー、スイス、そしてイギリスからの受講者が集まる。本講習会の際に、戦前のドイツ柔道連合及び戦前のヨーロッパ柔道連合が発足した。したがって、この講習会はヨーロッパの柔道の基盤となった。

戦後になると、ドイツの柔道はドイツ連邦共和国（以下、「旧西ドイツ」とする）とドイツ民主共和国（以下「旧東ドイツ」とする）のドイツ両国において別々に展開することになる。東京オリンピック以降、旧西ドイツの柔道は子供を中心としたスポーツへと展開することになる。それに対して、旧東ドイツにおいてスポーツ科学の影響を受けた競技スポーツとして普及が見られる。

1990 年のドイツ再統一と同時に東西の両連盟はドイツ柔道連盟（以下「独柔連」とする）として統一することになる。1995 年、独柔連は昇級審査規定の基準を全国統一し、2004 年にこの審査規定は大きく改正されると同時に、ジュニア選手の育成を目標する「柔道指導要領」も新たに採用される。2006 年、近年の子供に見られる運動能力の低下に応えた 6 才以下の子供を対象にするプログラムが新たに導入される。2009 年、昇段審査規定も改正されることになる。

（2）ドイツ柔道の現状と特性

フランスと同様に、ドイツ柔道連盟も地域のスポーツクラブをベースにする中央集権化体制を図っている。また、ドイツにおいても柔道が子供を中心とする教育的なスポーツとして捉えられている。ドイツオリンピックスポーツ協会（Deutscher Olympischer Sportbund, DOSB）の2017 年度の統計によると、ドイツ柔道連盟は加盟団体 63 団体の中で 21 位となっている[6]。ドイツの柔道人口を年齢別に見ると、約 58 %は 14 才以下の子供からなることがわかる。2017 年度の独柔連の登録人口の 149,606 人中の約 51 %に相当する 76,360 人は 7 − 14 才の年齢層からなっている[7]。

	6才以下	7−14才	15−18才	19−26才	27−40才	41−60才	60才以上	計
男子	7,729	54,013	11,796	9,860	9,479	11,444	3,086	107,407
女子	2,993	22,347	5,170	4,130	3,564	3,564	503	42,199
計	10,662	76,360	16,966	13,990	13,043	14,996	3,589	149,606

図２　2017年度の年齢別のドイツ柔道連盟の登録人口

（ドイツオリンピックスポーツ協会の統計を参照して作成、Deutscher Olympischer Sportbund 2017: pp. 4-5）

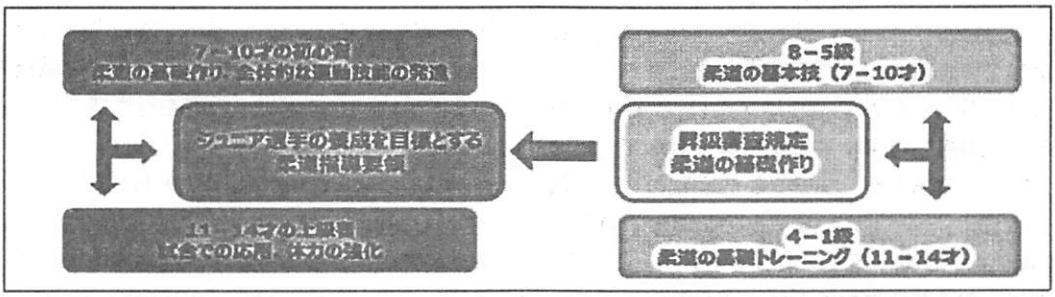

図３　昇級審査規定と柔道指導要領の構成

ドイツ柔道連盟は技術の基準も含む柔道教育の全国統一化を方針とし、柔道指導は独柔連のガイドラインに従って行われる。ドイツにおける柔道教育は「予備段階」、「柔道の基礎作り」、「有段者・指導者養成」の三段階からなる一貫したプログラムとして構成されている。最初の段階となる予備段階は「遊びながら柔道を習う」というプログラムからなる。このプログラムは 7 才以下の子供を対象とし、子供の基礎的な体力や運動能力を養うと同時に子供達に柔道を楽しませることを目標としている。次の段階となる柔道の基礎作りは 7−14 才の子供を中心とする「昇段審査規定」及び「柔道指導要領」というガイドラインに基づいている。昇級は 8 級から 1 級までの各段階からなるが、8 級から 5 級までは「柔道を知る、基本を創る」という初心者の段階と、習ってきた柔道を「深める、広める、変える」という上級者の段階に分けてある。昇級審査規定の審査科目は「受け身」、投げ技と固め技の「基本」と「応用」、「乱取り」、「形」（3 級以上）からなる[8]。

昇級審査規定にあわせて、競技者の育成を目標としている「柔道指導要領」も初心者と上級者の段階に分けてある。「柔道指導要領」の上級者の段階は競技者の基礎トレーニングにもなり、競技者への専門化への第一段階となる。昇級審査規定は柔道の技法を幅広く学びながら基礎を作ることに対して柔道指導要領は競技者として必要となる技術と試合戦略の取得を目標としている点で昇級審査規定の内容と大きく異なっている。

昇段審査規定は 1 級を取得した 15 才以上の柔道家を対象としている。有段者の段階において柔道の技術の習得と理解に加えて指導者とし

ての知識と能力も審査されているので、昇段審査は指導者を養う段階にもなる。

フランスと同様に、ドイツにおいても地域のスポーツクラブは柔道活動のベースとなる。多くのスポーツクラブにおいて子供を中心とする教育的なスポーツとしての普及は中心となっているが、14 才になってから柔道から離れる青少年が多いことは主な問題となる。その結果として競技者は少なく、将来、国際レベルで活躍できる選手の育成は困難な問題である。

4．ブータンにおける柔道の主な展開とその現状

（1）ブータンにおける柔道の主な展開と現状

世界中に「幸せの国」として知られているブータンは南にインド、北にチベット（中国）と境している南アジアの王国である。ブータンの人口は約 75 万人で、平均年齢は 27.6 才である[9]。面積は 38,394 平方キロメートルで九州とほぼ同じであるが、ブータンの面積の 80 %以上は 2000 メートル以上の高さにある。首都は 2,400 メートルの高さにあるティンプーである。現在、柔道が行われるのは、首都ティンプーのみである。21 世紀に入ってから遅れて近代化したブータンは貧困、経済、健康、教育等に関わる多くの問題を抱えている。テレビ、インターネット等を含む海外の大衆文化が急速に導入される影響も受けて暴力行為、薬物反乱等を含む少年犯罪も大きな問題になった。この状況に応えてブータン柔道協会は人間教育としての柔道の普及を目標とすることになった。[10]

ブータンの柔道は 2010 年にブータン唯一の柔道クラブとして発足した首都ティンプーにあるペルキル私立高等学校の柔道クラブに始まる。2013 年、ペルキル私立高等学校の柔道クラブはブータン柔道協会（Bhutan Judo Association）になった。ブータンでの柔道の普及と貢献に大きく貢献したのは、青年海外協力隊に派遣された日本人の柔道家である。2010 年、甲南大学の卒業生山崎道洋は全日本柔道連盟の学生ボランティアとして派遣され、2013 年から岩渕雄夫氏も指導者として派遣された。2014 年から 2016 年にかけて海外青年協力隊員として派遣された本校の職員である堀内芳洋氏が指導を行い、2017 年に堀内氏の後任として派遣された内田美憂氏は現在指導を行っている。2016 年、ブータン柔道協会は国際柔道連盟の加盟団体として認められた。その結果として 2017 年、ブータンの選手は初めてジュニアの国際大会に出場することになった。現在、ティンプー各地から多くの子供達が練習に参加し、ブータンの柔道人口が 100 人を超えることになっている。

（2）現場で見てきたブータンの柔道の現状

著者は 2017 年 8 月 18 日から 24 日にかけて、川崎市にある中学校の教員で柔道部の顧問として柔道指導にかかわる町田郁子氏とブータンに旅立つことになった。元青年海外協力隊員として 2年間ブータンで柔道を教えた本学の職員堀内芳洋氏の紹介で道場の視察を行う機会を得られた。

バンコクで一泊してから 19 日の朝に 2,300 メートルの高さにあるパロ空港に着いた。パロ空港はブータン唯一の国際空港であるが、滑走路は一つしかなく、誘導路から直接に旅客ターミナルまで徒歩で移動できる小さな空港である。パロ一で着陸してから伝統的な建築に建てられたターミナルビル、民族衣装を着る税務官と王族の写真は最初に受けた印象である。続いて、車で柔道場がある首都のティンプーまで移動した際に、緑と山が多い自然に感動し、牛、馬、野良犬、野良犬の姿がよく見えてきた。ガイドの話によると、ブータンの人々は仏教の信者として全ての生き物を大事にしているため、動物を殺してはいけないという。今日は肉を食べる習慣があるが、肉は海外から輸入されているか、事故などで亡くなった動物の肉のみである。同じ理由で漁獲も禁止されている。また、ブータンにおいて僧院や寺院が多く、風景でも仏教文化の影響が強く感じられる。

初日、訪ねたペルキル私立高等学校の柔道クラブにおいて内田美憂氏は上級者、ペマ・ダルガイ氏は新しく入会した初心者の指導にあたった。元テコンドー有段者のペマ氏は 2010 年か

図 4　ブータンのペルキル柔道クラブの子供達との写真

ら柔道を始め、僅か 6 名のブータン人の柔道有段者の一人である[11]。

現在、ブータン柔道協会に約 140 人の柔道家が所属しており、その中で小学生の割合が最も多い。練習日は月曜日から土曜日までの 6 日間に行われる。

稽古は日本と同様に、準備運動、回転運動や受け身等を含む補強運動から打ち込み（投げ技の入り方を中心とする基本動作）、技の反復練習、乱取りと整理運動からなっていた。準備運動、補強運動や整理運動は全員で行われるが、柔道の稽古は基本的に小学生を中心とする初心者と、中学生と高校生がメインとなる上級者の二グループに分けて行われれる。

町田氏と著者は 19 日と 21 日にグループ別に指導を行った。真面目に人の話を聞く初心者グループの小さい子供達の姿勢が著しく、上級者は技術のレベルが高く、柔道の基礎が身に付けられている。稽古の雰囲気は日本とほぼ変わらなく、礼法も日本と全く同じく日本語で行われていた。ブータンの子供達は稽古終了時に日本語で「有り難うございました」と大きく声を出した。

図 5　初心者指導の様子

海外青年協力隊、オーストラリア柔道連盟、神戸ブータン友好会の支援を初め、世界や日本からの柔道着や畳の寄付等を含む幅広いサポート活動があるが、多くの柔道家は柔道着を買えない、クラブの会費を払えない等の経済的な問題を抱えている。また、将来の選手育成を考えて柔道専用のトレーニングセンターの建設も望ましい。さらに、中学生になると、やめる子供達が多いのも現実である。ペマ・ダルガイ先生の話しによれば、その理由は経済的に余裕がない家族の柔道に対する理解が足りず、将来に向かって勉強や就職に集中して欲しいというのが一つの原因である。

5．カンボジアにおける柔道の主な展開と現状

（1）カンボジアにおける柔道の主な展開

現在、カンボジアにおいて柔道人口が少なく、柔道が行われるのは首都のプノンペン以外にシエムレアプのみであり、柔道場は僅か２～３ヵ所に過ぎない。今日の柔道の普及程度はカンボジアの歴史に関連している。

カンボジアはヴィエトナム戦争の影響も受けて 1967 年から内戦に入り、1975 年から 1979 年までクメールルージュの政権下に置かれた。1976 年からポルポトを最高指導者としたクメールルージュ政権は農業国への回帰を目標とした過激な共産主義革命を実施した。この革命によって都市住民が地方農村部へと強制的に移住

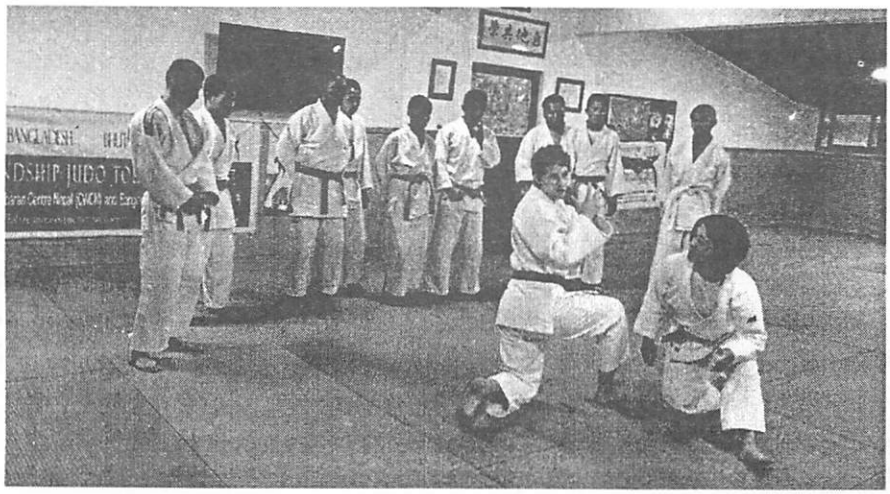

図６　上級者指導の様子

図７　ペルキル柔道クラブのペマ ダルガイ先生との写真

させられ、自由市場経済、学校教育、通貨や財物、宗教や伝統文化が廃止され、アンコール遺跡群を含む数多くの文化遺産が破壊されることになる。クメールルージュ政権下で数多くのカンボジア人は飢餓や大量虐殺によって命を落とすことになるが、特に反対派とみなされた少数民族、宗教の信仰者、インテリ等は虐殺の犠牲者になった。正式な数字が存在しないが、カンボジアの人口の 25 %程がクメールルージュ政権下に殺された。カンボジア各地に虐殺が行われた「キリング・フィールド」という刑場跡が残っている。1979 年、ヴィエトナム軍の侵攻によってクメールルージュの政権が崩壊されたと同時にカンプチア共和国が成立され、1989 年にカンボジア国へと改名されたが、クメールルージュは 1980 年代までヴィエトナムに対するゲリラ戦を続けた。その結果としてカンボジアのインフラがほぼ破壊され、内戦中にカンボジア各地の土に埋められた数多くの地雷は今日まで犠牲を引き起こしている。1993 年に王政が復古されたと同時に現在のカンボジア王国が誕生した。現在のカンボジア王国の人口は約 1600 万人であるが、カンボジア国民の平均年齢は 25.3 才となっており、65 才以上のカンボジア人の割合は僅か 4.25 %となっている[12]。

海外青年海外協力隊の派遣で初めて日本人指導者がカンボジアで指導したのは、1966 年のことである。1967 年からの内戦やクメールルージュの政権の影響を受けて柔道を含む教育及び文化やスポーツ活動が停止されることになった。その結果として柔道の普及状態はほぼセロの状態に戻ったといえる。現在、現場指導や畳、柔道着や帯の寄付等を含む普及活動を通じてカンボジアの柔道を支える日本の方々が多くいる。また、2017 年から 2019 年にかけて行われる「日本アセアン自他共栄プロジェクト」の一貫として去る 2017 年 9 月に講道館で開催された国際セミナーにおいてカンボジアの柔道家も参加した。また、翌 2018 年 9 月、日本カンボジア友好 65 周年の記念事業としての柔道セミナーが開かれた。

以上のように、カンボジアはまだ柔道人口が少なく、柔道の指導者も足りず、設備や用具の問題もあるので、まず基盤を作る必要があると考えられる。

（2）現場で見られた柔道の状況

2018 年1月私はカンボジアのシエムレアプにおいて柔道の現場調査を行う機会を得て、国際日本文化学園にあるアンコール柔道場を訪問することになった。柔道は国際日本文化学園・一二三日本語教室という私立学校に通う生徒を対象にする教養活動として行われている。一二三日本語教室の生徒は 20 ドル程の月謝を支払い、日本語の授業以外に柔道を含む教養活動にも参加できる。柔道の稽古は週 2 回土日に各 2 時間程度で、生徒の年齢は 10 ～ 20 代で、生徒数は約 20 名程であった。稽古は有段者の指導者の指示に従って準備運動、補強運動や受け身から始まったが、受け身は基本だけではなく、生徒は演武向けの高く飛ぶ受け身も練習していた。練習の場所は比較的に狭く、畳のスペースも小さかったが、練習環境にもかかわらず生徒は柔道熱心で一生懸命に稽古に励んでいる。柔道用

図８　アンコール柔道場の生徒達との記念写真

の畳が寄付される以前、空手道用の薄いマットが使用された。また、空手道の道衣や手作りの柔道衣を着用した生徒も何人かいた。

視察の当日は生徒の希望によって二つのグループに分けて実技の指導を行った。生徒のレベルは初心者から基礎がある程度で身に付けられた上級者まで至った。限られた設備で、稽古時間が少ない環境で、明るくて笑顔で柔道の稽古に励む生徒の姿は印象に残った。

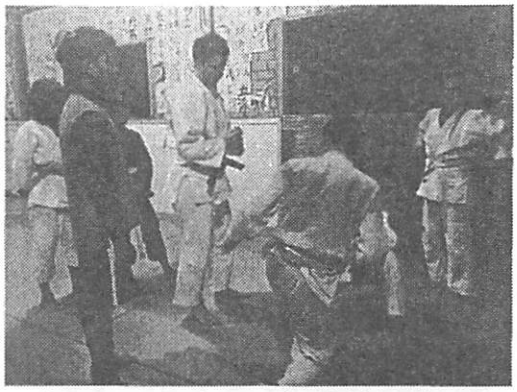

図９　アンコール柔道場での実技指導の様子

おわりに

以上の４ヶ国の事例を見ると、柔道の普及程度、状況及び将来に向けての課題は国によって大きく異なることがわかる。先進国であるフランスとドイツにおいて柔道が社会に定着し、独自の柔道教育が形成されてきた。

それに対して発展途上国であるブータンとカンボジアにおける柔道の普及活動を考えると、柔道の存在理由とその可能性を考える必要があり、両国の文化にあわせたアプローチや指導法が求められている。ブータンとカンボジアにおいて基盤を造り、競技スポーツより先に教育としての柔道を普及する価値がある。

参考文献

Brousse Michel and David Matsumoto, Judo. A Sport and a Way of Life, Korea: International Judo Federation, 1999.
Deutscher Olympischer Sportbund, Bestandserhebung 2017, Frankfurt Main: Deutscher Olympischer Sportbund, 2018.
Feldenkrais Moshe, Higher Judo. Groundwork, Berkley: Blue Snake Books, 2010.
濱田初幸「フランス柔道と武道理念に関連する研究」鹿屋：鹿屋体育大学、2008、114 － 117 頁。
濱田初幸・イーブ・カドー「フランスの柔道指導者資格制度を考える・事例報告」日本武道学会編集「武道学研究」48 － 2、東京：日本武道学会、2015 年、89-112 頁。
岩渕雄大「ブータン王国柔道指導報告」講道館編集「雑誌・柔道」東京：講道館、2014 年 4 月、62-65 頁。
柏崎克彦「柔道の歴史とその精神」国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所編集「武道の歴史とその精神（増補版）」勝浦：国際武道大学、2012 年、144-168 頁。
村田直樹「第二章武道の歴史・第 1 節柔道の歴史」田中守・藤堂良明・東憲一・村田直樹共著「武道を知る」東京：不味堂出版、2010、50-58 頁。
坂上康博（編集）『海を渡った柔術と柔道』東京：青弓社、2010。
ソリドーワル、マーヤ「ドイツにおける柔道の現状：指導法を中心に」国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所編集「グローバル時代の武道：比較文化論的考察とグローバル化に向けての課題」勝浦：国際武道大学、2012 年。
山崎道平「ブータンでの柔道指導」講道館編集「雑誌・柔道」東京：講道館、2011 年 3 月、72-76 頁。

注

[1] 国際柔道連盟の加盟団体一覧参照。International Judo Federation,［https://www.ijf.org/countries］（2018 年 9 月 17 日）。

[2] 柏崎 2010：149 頁参照。

[3] 村田 2000：55-56 頁参照。

[4] 柏崎 2010：154 － 155 頁参照。

[5] 濱田 2018：114 頁参照。
[6] DOSB 2017: 9 頁参照。
[7] DOSB 2017：4－5 頁参照。
[8] ソリドーワル 2012：154-155 頁参照。
[9] ブータンの人口統計プロファイル（Bhutan Demographics Profile 2018）参照。[https://www.indexmundi.com/bhutan/]（2018 年 9 月 19 日）。
[10] 山崎 2011：72-73 頁。
[11] 岩渕 2014：63 頁参照。
[12] カンボジアの人口統計プロファイルを参照。[https://www.indexmundi.com/cambodia/demographics_profile.html]（2018年9月18日）。

（マーヤ・ソリドーワル Sori Doval Maja・本学講師）